挑め！
壁の向こうへ

⑰ニンニク「青森福雪」

青森県産業技術センターの研究

独自品種 08年から開発

26年秋の栽培開始目指す

青森県の重要な特産野菜などの優良品種開発や種苗増殖、優良種子生産を行うのは、県産業技術センター野菜研究所（六戸町）の品種開発部だ。今年、開発を進めてきたニンニクの独自品種「青野にんにく1号」が県の有望品種に選定され、名称が「青森福雪（ふゆき）」に決まった。

国内生産量トップで、約7割のシェアを占める県産ニンニク。県内では在来品種の「福地ホワイト」と、住友化学（東京）が育種した「白玉王」が栽培されている。

青森福雪は従来品種より鱗片（りんぺん）数が少なく、一片が大きくて重いのが特長。大玉で収量が多く、球割れが少ないことから品質向上が見込まれる。

現在は種苗の増殖を進めている。2026年秋から生産者による栽培開始を目指し、市場デビューを見据える。県は将来的に白玉王と共に主力品種として、県産ニンニクのブランド力向上につなげたい考えだ。

福地村（現南部町福地地区）が発祥とされる福地ホワイトは、県外でも植え付けされている。県は国産ニンニクのトップブランド産地としての地位を盤石にするため、新たな独自品種の開発に力を注いできた。野菜研究所で種苗を安定供給し、他県への流出を防ぐ狙いもある。

青森福雪の開発は08年に始まった。福地ホワイトの1万2千株から選抜し、大きさや形の良い系統を絞り込んだ。12年に6系統、18年に2系統まで減らし、4人目の担当者となった研究管理員の鹿内靖浩さんが業務を引き継いだ。

当初は1年で1系統に絞る見込みだったが、センターのベテラン研究員から「待った」がかかった。独自品種として認めるのに必要な特性の均一性が「不十分」と指摘されたのだ。

そこから、形と大きさを両立した株を厳選する取り組みがスタート。「地道で近道のない作業」（鹿内さん）が続いた。ひたすらに栽培と比較を重ね、5年かけて1系統を選んだ。

過去にも、県はニンニクの品種改良を1999年から実施。08年まで放射線を用いた育種法を福地ホワイトで続けていたが、品種登録まで至らなかったという。

その歴史を知るだけに、鹿内さんは「先輩や仲間から受け継いだ結果が形になってくれた。達成感よりも安堵（あんど）感が勝った」と充実した表情を見せる。

名称発表後、野菜研究所には生産者から新たな品種開発を歓迎する声が寄せられた。

鹿内さんは「フルーツやコメとは違い、品種の名称がブランドとして前に出ることはニンニクではあまりない。青森福雪がスーパーの売り場に並んだ時に『青森のニンニクは大きくて白い』と名前通りの印象を持ってくれたらそれでいい」と強調する。

品種開発部の鎌田直人部長は「県産の評価を高めて産地を活性化させ、新規の若い農家がニンニク栽培を始めるきっかけになれば」と期待を寄せる。

（船渡拓）

※第1月曜日企画

青森福雪の苗を確認する鹿内靖浩研究管理員＝10月24日、十和田市

◆青森県産業技術センター野菜研究所　六戸町犬落瀬に試験ほ場と実験棟、事務所を構える。1937年に設立した農林省指定酒精原料作物試験地が前身。現在の職員は木村勇司所長を含め22人で、栽培部と品種開発部、病害虫管理部の3部署で構成する。ナガイモやニンニクなど県の特産野菜を対象に、栽培方法の改善や新品種開発、効果的な病害虫防除技術の研究などを行っている。

県産業技術センター野菜研究所が開発した独自品種「青森福雪」（右）と、従来品種の「福地ホワイト」

デーリー東北新聞社提供（令和４年11月７日掲載）
※この画像は、当該ページに限ってデーリー東北新聞社が利用を許諾したものです